昭和57年7．23長崎大水害

鎌田泰彦・近藤　寛（長崎大学教育学部地学教室）
Yasuhiko KAMADA・Hiroshi KONDO
松岡数充（長崎大学教養部地学教室）
Kazumi MATSUOKA

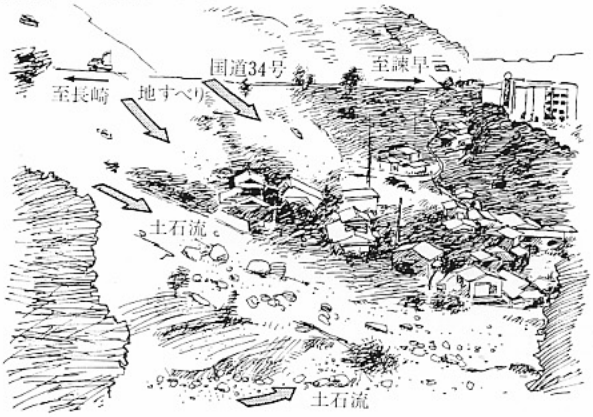
昭和57年7月23日の17時から22時にかけて集中的に長崎県南部を襲った滝のような豪雨は長崎市を中心とした県下一円に死者・行方不明者299人　家屋・商工・農林・水産・河川・道路などの被害総額3,150億円という大惨禍をもたらした．この長崎大水害における降水量は時間雨量187 mm（長与町）というわが国の気象観測史上第1位のものでありまた長崎市東部の矢上町における7時間降水量は実に531.5 mmにも達した．

長崎大水害における人的被害の9割近くは住宅地や道路を襲った土石流・山崩れ・崖崩れなどの土砂崩壊によるものであった．とくに被害の大きかった長崎市川平町筒水平（とつばみずだいら）（死者32人）は閃緑岩地域の土石流　鳴滝（24人）・本河内町奥山（24人）は安山岩質火山岩類地域の山崩れによる災害であった．また長崎市街地に入る重要幹線である国道34号を約1か月間不通にさせた芒塚（すすき）では　崩壊性地すべりによる切土斜面の崩壊　道床の欠壊・流出　および2条の土石流が集中して災害が起き　国道下の住宅地ではさらに死者23人を出す惨事となった．

長崎市東部八郎川の東側にそびえる普賢岳・行仙岳は角閃石安山岩で構成された溶岩円頂丘であるが　ここにも流動巨離の長い多数の土石流が発生した．谷の出口付近の住宅地を襲った渓流堆積物の流下により58人にもおよぶ死者（上戸石町15人飯盛町補伽（ほとぎ）15人を含む）を出している．

写真1　長崎市奥山における崩壊地の全景（二つの滑落崖をもつ）．

写真2　奥山における滑落崖近景．基岩の凝灰角礫岩が岩屑の流出によって露出している．



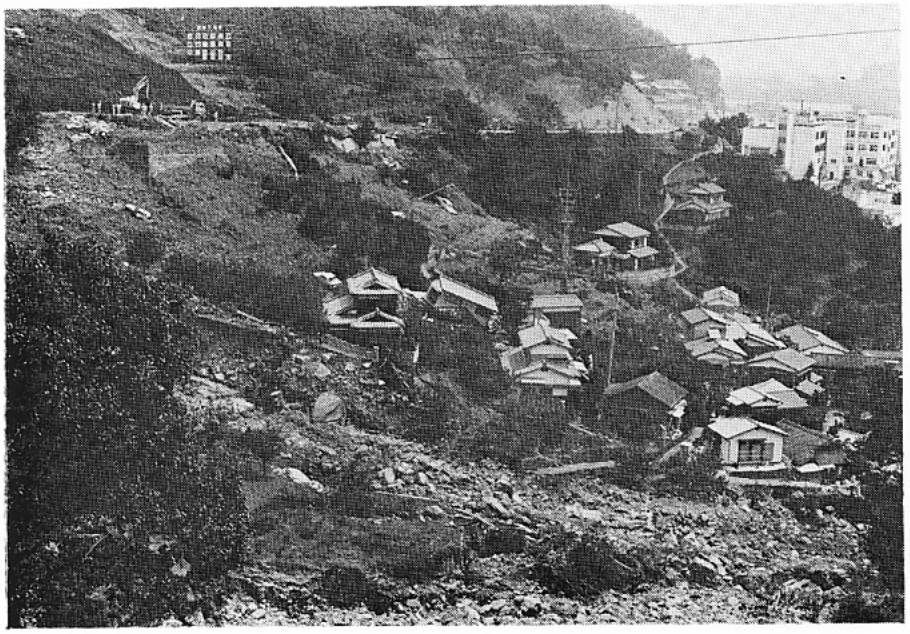


写真3 長崎市芒塚（すすきづか）における地すべりと土石流災害現場．

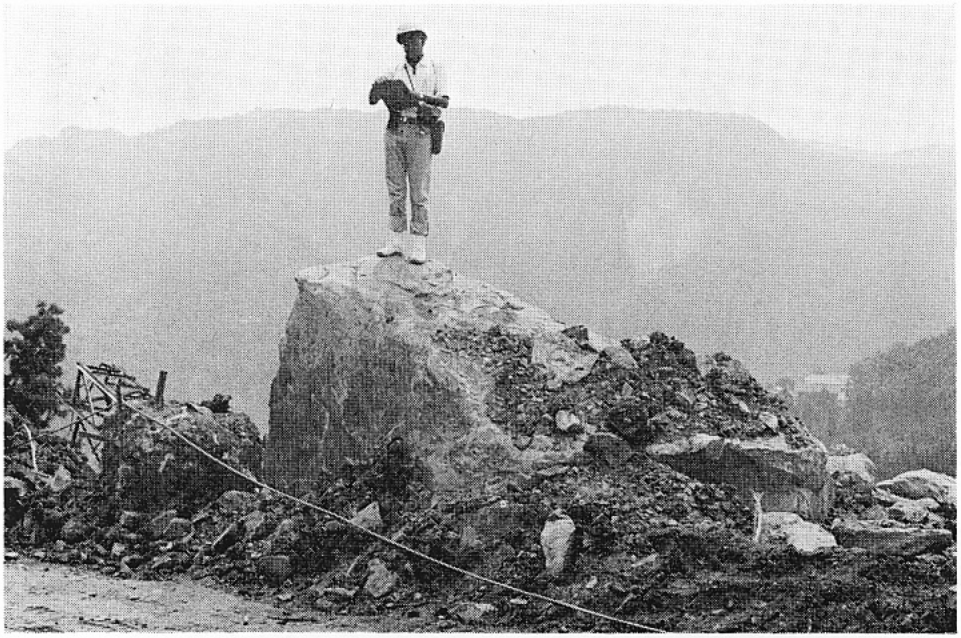


写真5
国道に転げ出た巨石
(輝石安山岩)

写真6　八郎川に流れ込む清水川の土石流の末端部の状況.

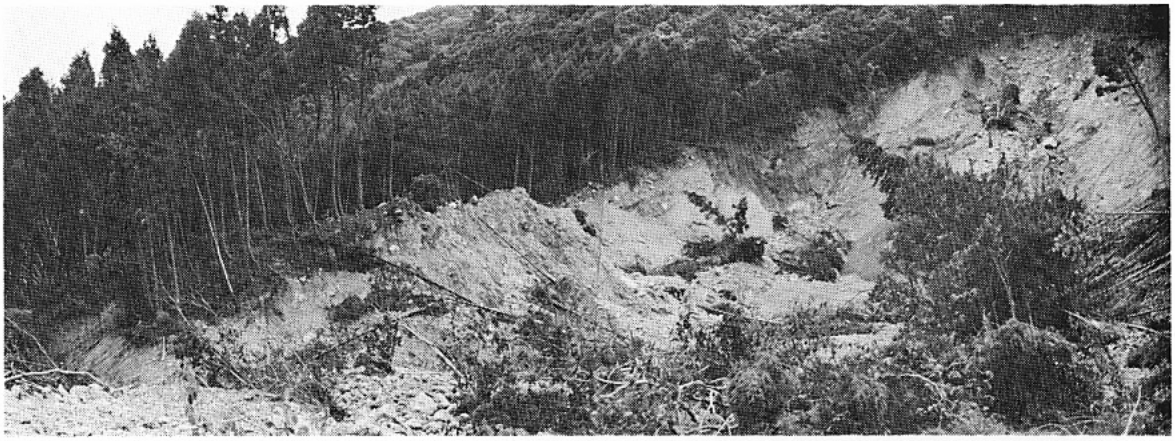


写真7　長崎市船石町千束野の土石流における　地すべり性崩壊と土石流（左下に土石流の堆石物が見られる）.

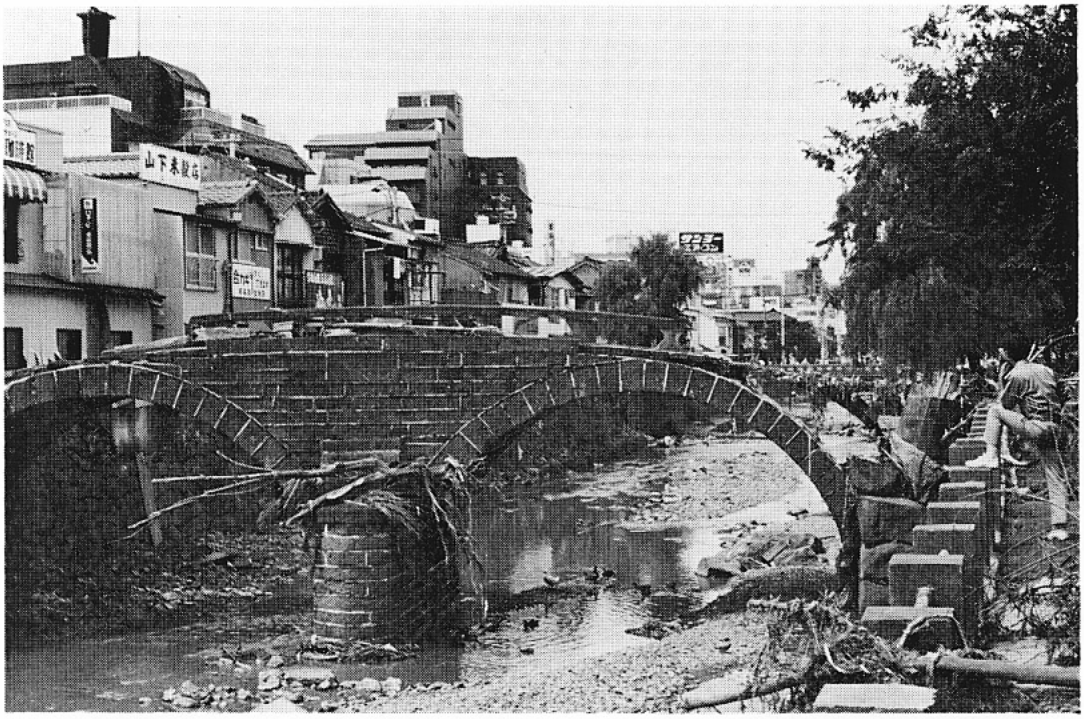


写真８　構造物の被害状況．中島川の氾濫による国宝・眼鏡橋の沢壊（らんかんてすりの流出）．

写真９　清水川の土石流によって半潰した民家（瀬古）．